

インプラント患者の長期的管理 ～ その現実的対応

村上 齋

愛知県 ソフィアインプラントセンター 所長

米国歯科大学院同窓会会長

講演抄録

ニューヨーク大学歯学部 *Advanced Education Program in Prosthodontics* に在学中の 1983 年に初めてオッセオインテグレートッドインプラントの臨床を目の当たりにして以来、現時点で約 30 年以上にわたってインプラント治療にかかわっている。当初は世界中でそうであったように、ブローネマルク博士が確立したシステムに則り、無歯顎患者のみを治療対象としていた。やがてこのタイプのインプラントは部分欠損症例にも応用できることが明らかになると、治療対象となる症例は飛躍的に増えたが、一方で、残存天然歯も含めて治療結果を長期的に維持・管理する必要が生じ、無歯顎症例だけを扱っていた日々とは比べものにならないくらいにインプラント治療の難易度は高まってきている。

インプラント治療の治療計画立案に当たっては一人ひとりの患者の属性を考慮し、さまざまな角度から合理的で実現可能な計画を提示し、患者の同意と選択にもとづいて治療を実行するわけだが、治療完了後の経過が必ずしも期待通りに推移するとは限らない。特に歯内療法が施された歯や歯周病に罹患した歯が残存している場合には、そのような歯の本数や歯列内での配置によっては長期的管理の観点からのリスクが高まることもある。また、インプラント補綴に関して頻発するトラブルとして上部構造の素材に由来するものが挙げられるが、多くの場合、これは比較的容易に対応しうる。一方で長期的保存を意図した残存天然歯を短期あるいは中期で喪失すると、多大な時間と費用を必要とする再治療や追加治療を余儀なくされることになりかねない。

本講演では、最初の治療介入後 20 年以上を経過した症例を供覧し、その経年的変化とその間の対応について解説する。